

私の頭の中のまだエンピツ②

そだちと臨床研究会 川畑 隆

感じ方や考え方の小さな変化

「まっとうに」ということ

「まっとうに」とは、最近流行の「コンプライアンス」にあたる言葉になるでしょうか。法令や規則に違反しないだけでなく人道的倫理的にも正しい方向を目指すことだと解釈していますが、対人援助職場は「こんなふうに生きていこうよ」と被援助者や住民に対して直接的には言わないまでも、実質的に前向きで「まっとうな」歩みを提案し後押ししています。それは相手の少しでも厚い幸せをめざして仕事をしているからで、「まっとうで」ないところからは幸せは芽を出さないと考えているからです。だとしたら、「相手に対してそのようにすすめているのに、自分たちは『まっとうに』仕事をしようとしていなくてよいのか」と、あらためて自分や自分の職場に対して問いかけてもよいのではないのでしょうか。

無論、対人援助職場は「まっとうに」仕事をしているわけで、していないと言いたいのではありません。しかし、たとえば行政から施策が現場に降りてきたときにそれが現場にフィットしているか、住民の福祉に役立つ

方向に機能させられるかどうかなどについて、現場として「まっとうに」意見をもちそれを業務に反映させられているかどうか、問われる場合もあるだろうと思うのです。

また、住民にわかりやすい広報のありかたや、目の前の対象者の生活の実際によりそった対応や公平性が保たれているかのチェックも、あらためて必要な場合があるでしょう。さらに時代の流れや世の中の動きにも敏感でいながら、行政・臨床機関としてどう柔軟でバランスのよい思考・判断を行うのかも問われているところがあります。

〇か一〇〇か

「事実か嘘か」「問題か否か」……これらは「〇か一〇〇か」「白か黒か」「二分法」「悉無律」などと呼ばれる思考パターンです。そしてこれがいま社会を覆っていて、「人権侵害かどうか」など、ものごとをわかりやすく整理して革新していくために役立っている側面があります。しかしそれと同時に、「正しいか誤りか」「勝ちか負けか」と人を二者択一の窮屈な状況に追い込み、自由な意見表明などにブレーキをかけてしまうことも起きているように思います。世の中の役に立つ部分については「〇か一〇〇か」を推進すればよいのですが、すべて「〇か一〇〇か」で整理するのではなく、「四〇とか五〇、六〇」ぐらいも認めて受け入れていくようなことも無理がなくてよいのではないのでしょうか。私がここに書くことについても「一〇〇」を主張したいわけではなく、後でも述べるように、そうとはいきれないところもあるよなあと思うわけです。そういった整理されないところも切り捨てずに、つまり曖昧なところは曖昧なままに尊重するよう

なバランス感覚も必要ではないでしょうか。

たとえば、周りに合わせることから解放され、自分がやらなければならないことではなく、やりたいこと、自分らしさを徹底し追求していく価値観は、生きにくさを抱えた人たちの対人援助の場にも適用されています。

もちろん、それは人を支援する時の最初のプロセスとして重要な側面であることは確かだろうとは思いますが、耳にやさしいことばである分、一般論として広がりすぎることには私は懸念をもちます。願わくば、その価値観が個々人の中で自分中心に世界を描き続けることに偏らず、「他者と自分との違い」を十分に受け入れ尊重しそこにも参加していく心情や行動力の育成にもつながってほしいと思います。後者の他者尊重性が「一〇〇」になれば周りに合わせることからの解放にはなりません、前者の自分中心性が「一〇〇」になっても他者と一緒に生きる社会での生きにくさを作り出すことになります。そうならないためには、「やりたいことがやれるかやれないか」「自分らしいかそうでないか」という一見わかりやすい枠組みだけで切り取ろうとせず、「やりたいとはどういうことか」「やりたいかやりたくないかではなく…」「自分らしさとは何か…」と惑う機会も与えてくれるような、「五〇、六〇」の体験が可能な場も用意される必要があるだろうと思います。究極の対人援助が「私がつけている素質をすべて開花させたい」という相手の潜在的ニーズに寄り添うことだとしたら、「一〇か一〇〇か」による安易な決めつけには用心したほうがよいでしょう。

…だといっても

私が「一〇か一〇〇か」に懸念を示すことになる理由のひとつに、「もの

「ごとはいろんなふうにつながっている」という認識のしかたがあるように思います。それぞれの事象の背後にはいろんな事情やワケがあり、そのような関連づけられたつながりを考慮せず表面的な額面だけで割りきって対応しても、うまくいかないのだというわけです。そしてこの認識は、対人援助業務においても大切な役割を担い、私のものの考え方にも根をおろしている重要なものです。そしてその認識を次世代の人たちにも引き継ぎたいと考えてきたことも事実です。

しかし、その関連づけられたつながりを読むことが深く賢いと思われたり、まさに重要なのでそれに縛られてしまい、言葉や行為を自由に発しにくくなる側面があります。つながりが足かせになってものごとの本質を明確にして前に進んでいくことが妨げられるのです。最近のエピソードなので例にあげますが、自分に投票する議員を確保したので政党総裁選候補者が“裏金問題”の再調査を言明しないように見えることなどもそうです。「Aという足かせがあるから、Bは不可能だし仕方がない」という現状の限界から「Aという足かせはあっても、Bは重要なことだから実現する」という方向への認識と行動の変化が伴わないと、つながりの関連づけの賢明さはそのデメリットを引きずり続けるのではないでしょうか。Bは「五十か六十」でよいわけではなく「〇か一〇〇」なのです。

そこが動いているんだろうか

あるテレビドラマの一場面をとっても興味深く観ました。母に隠れて投資し失敗した父に対して、母はそれを父の自分への「裏切り」として責め立てました。でも、そこにいた息子は「それは裏切りなんかじゃなくてヘマ

ただけでしょ。それをそんなに責め立てるかなあ」と軽く母に言い返したのです。その「ヘマ」とのいきなりの言い換えは私にとって衝撃的でした。私なら裏切りだとの母の発言を「そう思ってるんだ」と受けとめたうえで対応するかもしれませんが、息子は裏切りと投資の失敗とのつながりを即刻断ち切ったのです。裏切りというバーのネガティブさを少しでもクリアできないかと思案する私の前で、そのバーが端からないかのように難なく軽々と飛び越えて見せた、そのシンプルさが衝撃でした。

また、私が書いた本を読まれたかたの「（著者は）古い人なんだなと思った」というレビューを目にしました。どうも「いじめの始まりにからかいがあるとしても、からかい全体がダメだと言われるのはいかがなものか」という文章への反応かもしれないと勝手に思ったのですが、『からかいはダメ』のようにアレはダメ、これもダメと切り取っていくようなことが、これからの社会にとってよいことなんだろうかという問いは、古いか新しいかではないでしょう」と反発を覚えました。しかし「からかいは人間社会の潤滑油みたいなものだから大目に見ていこうよ」という気分が、いじめをなくす意思よりも実は私の中で勝っていることを見抜かれたのだとしたら、「からかいは潤滑油みたいに機能することもあることは確かだ。でも、いじめに該当することになるからかいはダメだ」とは書かなかった私の古さを指摘されたのかもしれない可能性に思い至りました。

（了）

—宣伝—

『ターチャンのオリジナルソング』を十月一日からYouTubeにアップしています。昔の私が歌っている自作の歌です。しばらくの間、毎月一日に追加します。よかったら覗いてみてください。